

花見歸會
風呂後會

茶會節序

入レ、燒ガラ入レマデヲノセテ持出、サイゼンノ銀ヲヲロシ客ノ前ニヲク、客銀ヲトリ香ヲ燒テ亭主ニ廻ス、亭主香爐ヲトリテ、棚ニテモ床ニテモ直シオク、此トキハ燒物ヲ燒カズ、香爐ヲ入ルレバ、燒物ヲタカズ、席ニ香爐アレバ、タカズト合點セラレヨ、
〔備前老人物語〕花見歸風呂上りの茶湯といふあり、これは人に依て花見の歸るさ、風呂の後の席に茶をまひらする也、その時はつねの衣服を著て迎に出、座へ請じて、倉相なる道具にて、まづ薄茶を以、次第にす、むべし、其茶過てのち爐火をなをし、つねのごとくせんを出し、それより眞にかまへ、衣服等もあらためよと也悉略す、

〔茶道筌蹄一〕同會 茶節序

大福 正月元日より十五日までの茶會をいふ 春 正月十五日以後を春茶といふ 風爐 曉夜咄はなし、七ツどきまでに釜仕舞ふ事、名殘 古茶の名殘といふ事也、風爐の名殘といふにはあらず、八月末より九月へかけて催す、口切 九月の末より催す、當年新茶の口切也、

〔槐記〕享保十年正月七日、參候、今日ノ風雪ニ能參リタリトテ、保君御方御盃頂戴、イトアリガタキヲ覺ユ、而シテ御前ニ出、今日ハ御嘉例ニテ大服ノ御茶湯アリ、久米玄察、宗也ナド參ル、雪モ一段トフリツ、バキヌルハ最面白ケレドモ、路次ノ行粧大キスギテ苦勞ナリ、後ハ晴ヤシヌラント御笑ナサル、

〔改正月令博物筌 四月〕朔日 風爐の茶日三月廿日風爐をかほさき、朔日より風爐にかはる、朔

〔茶之湯六宗匠傳記 三〕古田織部殿自筆の寫

一夏は風爐の茶の湯の時、總而の障子を明茶をたつる、てい主出て茶を點るにも、茶道口の戸をあけたつる、夏は暑き故、客も涼敷、てい主も涼敷茶をたつるなり、